

「シユール」なジャカルタ描く

風景画に 風刺込め 4月10日にケン・パターン展

ジャカルタの街を細密に描いたモノトーン作品で知られるジャカルタ在住のカナダ人画家ケン・パターンさんが、四月十日、リージェント・ホテルで、展示・即売会を開く。リトグラフ(石版画)、ペン画、彩色画など七十五点を出展、現実と非現実を行き来するかのような不思議な印象を与える「ケン・パターン・ワールド」を繰り広げる。

ケンさんの作品は、そびえ立つ高層ビルと昔ながらの赤レンガの家、といった開発の進む街と開発から取り残された風景を対比して描いたものが多い。

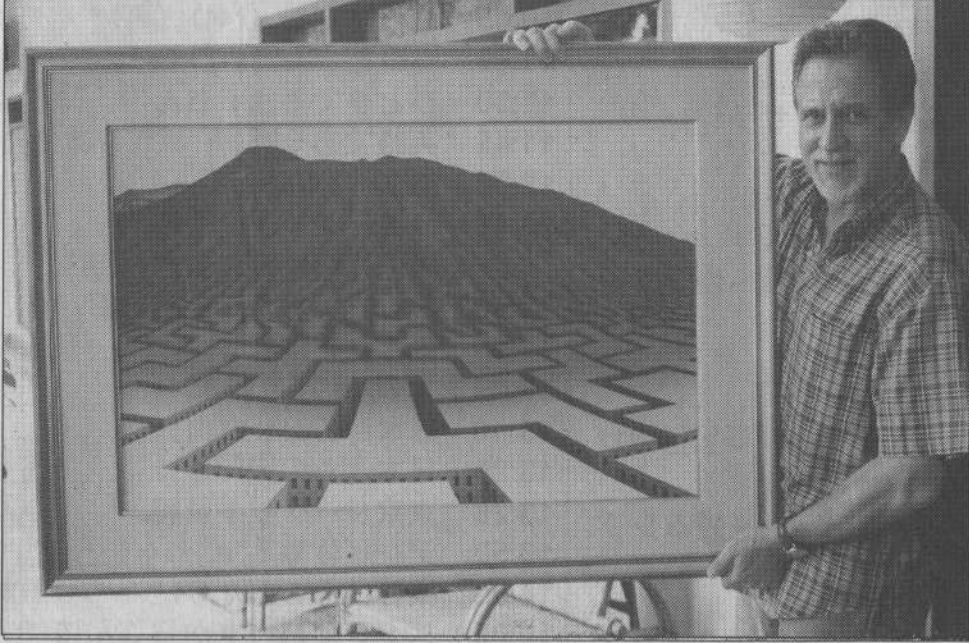
「インドネシアは両極端の国。すごく金持ちか、すごく貧しい。新しいか、古い。異なる二つの世界が同居している。だから、ジャカルタのイメージは彩色画ではなく、白黒」とケンさんは語る。

カナダ時代の作品では、バンクーバーの海岸に人の代わりに北極グマがいたり、湿原を傘が飛んでいたりする。しかし「ジャカルタの風景は手を加えなくて

もシユール(超現実的)と言う。

単なる風景画にとどまらず、そこに風刺を込め、メッセージを発信したいというのがケンさんの考えだ。「問題はどこの国にもあるが、インドネシアの場合、考えさせたい」

視覚的に見えやすい。高層ビルはマネー、下のスラム街は社会の基盤である人々。それを忘れてはいけない。私の絵は細部を樂しむこともできるが、物語のある本のように、見る人を



最近では、「インドネシアはまさしくラビリンス(迷宮)」とのアイデアから、迷路をモチーフにした抽象画の新作も発表している。

ケンさんは一九八九年からジャカルタに在住。来イして一年ほど経つてから、「インスピレーションをかきたてられ」、絵を描き始めた。機材などが必要なりトグラフはジャカルタでのスケッチを基に、バンクーバーのスタジオで制作している。

ペン画は最極細「〇〇五号」のペンを十本ほど取りそろえて描く。ソフトなタッチはインクのかすれかけたペンを使って表現するという。

展示・即売会は十日(火)午前十時―午後八時。ポストカードなども販売する。収益金の一部はカナダ婦人協会を通じ、インドネシアの社会福祉事業に寄付される。

迷路をモチーフにした作品「パンラゴ山エステート」(アクリル、1999)を示すケン・パターンさん。池田華子写す